

## Berlin Demography Forum 2018 報告

世界からみたフレイル：高齢期において一層注視すべき「できなくなる」状態への対応

成蹊大学文学部現代社会学科准教授 渡邊大輔

ILC のグローバルアライアンスチームによって、2018 年 4 月 10～11 日にドイツ・ベルリンの ESMT において開催された Berlin Demography Forum 2018 において Global Perspectives on Physical Frailty: A Disabling Condition in Late Life Deserving More Attention と題したパネルセッションを開催した。近年、世界中で注目を集めているフレイル(frailty、虚弱)について、その現状と対策について議論した。

この ILC のチームによる Berlin Demography Forum での報告は 2015 年より毎年おこなっており、2018 年も同フォーラムより招聘されて開催されたものである。今回のパネルセッションは、ILC アメリカの Ursula M. Staudinger 氏がチェアとなり、ILC イギリス、ILC フランス、ILC オランダ、ILC 日本からパネリストが参加した。また、ディスカッサントとして、ドイツの Hannover Medical School にてフレイルを研究している Ulrike Junius-Walker 氏が問題提起をおこなった。

報告では、各国のデータを統一的な基準で比較するために、Fried らによる身体的フレイルの評価基準、すなわち、①体重の減少、②疲労感、③日常生活活動量の低下、④身体能力(歩行速度)の低下、⑤筋力(握力)の低下、に基づいて各国のデータを持ち寄り検討している(Fried 2001)。その結果、加齢(とくに 75 歳以上)、女性、そして学歴が有症率に対してリスク要因であることを確認している。

そのうえで、各国のフレイルに対する対応について国ごとに検討した。各国の特徴としては以下のようなになる。イギリスでは NHS England が、65 歳以上の患者に対して GP がフレイルかどうかを確認するツールの開発が始まっており、予防的措置として転倒リスクへの対応などの仕組みも導入されている。試行的なものであるが電子化されたプライマリ・ケア情報をもちいた指標(eFI, electronic frailty index)の適用も始まっている。これらを活用することで早期の発見と介入を模索していることが紹介されるとともに、どのような介入や結果指標を設定すべきかについては課題があることも報告された。



右より筆者、オランダ、フランス、イギリス、ドイツ、アメリカ

フランスでは、まず SHARE データをもとにフレイルの有症率が、男性は改善傾向にあるが、女性は有症率が高くなる傾向にあることが報告され、フレイルについてのより詳細

な把握が必要であり、そのためのスクリーニング・ツールを開発中であることが報告された。

オランダでは、家庭医や病院において対応がなされており、また、限られた一部の自治体では75歳以上の後期高齢者へのスクリーニングを、看護師やソーシャル・ワーカー、訓練されたボランティアらがおこなっている。リスクありとされた場合には、家庭医に行くよう指導されたり、家を改装するなどの対応が取られている。

ILC 日本からは渡邊がパネリストとして登壇し、前述した調査概要について報告したうえで、日本におけるフレイル対策の特徴として以下 3 点を説明した。第一に、日本では地域包括ケアシステムの実現を目指しており、フレイル対策もこの枠内で行われようとしていること。すなわち、フレイル専門医のみが対応するのではなく、地域の多様な専門職や地域住民の協働によって対応しようとしていることである。第二に、フレイルの多元性に注目していることにある。日本ではサルコペニアやロコモティブシンドロームなど筋力の低下や活動量の低下を想定した身体的フレイルだけでなく、うつや認知症などを想定した心理的フレイル、孤立や閉じこもりなどを想定した社会的フレイルもあわせて考え、身体的フレイルと合わせて総体としてフレイルという概念をもちようとしている。またこのため、対策も多職種連携を前提とした地域レベルでのアプローチが想定されており、2018年からは厚生労働省においてフレイル対策事業が本格実施される。第三に、フレイルに対して予防的側面に焦点を置いていることにある。フレイル状態にある人に集中的に対応する2次予防だけでなく、住民全体の健康度を向上させることによってフレイルを予防する地域ベースの1次予防を重視している点にある。

このように、今回報告やディカッションに参加したすべての国(アメリカ、イギリス、フランス、オランダ、ドイツ、日本)のいずれにおいてもフレイルは今後のさらなる高齢化を見据えた重要な課題として位置づけられており、様々な実証研究や取り組みが行われていること、同時に、現時点ではベストといえる解決策は見つけられておらず、どのように対応すべきか試行錯誤がおこなわれているということが示された。

ディスカッションでは、フロアから日本の地域を中心とした取り組みについて肯定的評価が多くなされた。また、低栄養や過剰投薬の問題なども指摘され、多様な生活へのアプローチがフレイル対策において必須となることが議論された。グローバルなレベルで、高齢化がより一層進展するなかにおいて、フレイルはその象徴的かつ重要な問題を内包するものであり、また同時に、対応可能な問題である。その点を今回のセッションにおいて再確認したといえるだろう。